

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370557

研究課題名(和文)近代英語における形態・統語変化 否定辞縮約形とその関連構文の発達を中心に

研究課題名(英文) Morpho-syntactic Changes in Modern English: Correlation between the Establishment of Negative Contractions and the Development of their Related Idioms

研究代表者

中村 不二夫 (NAKAMURA, Fujio)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20149496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：don't, doesn't, didn't, can't, couldn't, won't, wouldn't, shan't, shouldn't, mayn't, mightn't等の否定辞縮約形と縮約形を内包する構文の歴史について、書籍資料と電子コーパスの両面からの大規模研究を行い、1点の著書(分担執筆)、2編の紀要論文、3つの国際会議口頭発表、1つの国内全国学会シンポジウムの司会・講師の発表の仕事を通して、世界の近代英語の研究に日本発の異彩を放った。

研究成果の概要(英文)：Little heed has been paid on the history of English negative contractions, with the possible exception of Brainerd (1989 [1993]). With no more than 461 examples collected from plays written between 1620 and 1800, however, his study cannot be regarded as well-grounded. Based upon the analyses of ten varieties of electronic corpora as well as one hundred and thirty volumes of private diaries and personal letters, I have attempted to elucidate the details of the history of negative contractions and their related idioms by delivering three oral presentations at international linguistic conferences and one oral presentation at a nationwide conference, as well as writing one jointly written book and two university journal articles.

研究分野：英語史

キーワード：英語史 近代 日記・書簡 統語変化 形態変化 助動詞 否定辞縮約

### 1. 研究開始当初の背景

英語史研究は、19世紀半ば以来、文学作品の言語分析に基づいた研究が主流であったが、報告者は、英語史を志した1970年代末から今日に至るまで、伝統的研究を補う形で、1500-1950年に書かれた日記・書簡資料を分析し、文法と語彙の歴史を正すことを研究課題としてきた。これらの資料は、言語変化の最前線を知る、語法の時代的欠落を補う、消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する、未発見ないしは報告例がまれな語法を発掘する、ある時代に生きた庶民の語法に対する生の証言を収集する上で貴重だからである。折しも、20世紀の終わり頃から、外国においても徐々に文学作品以外の英語も調査資料にすることの重要性が認識され始め、報告者の研究も意義をもつようになった。

まさにこのような背景の中、報告者は、長い伝統をもつ英語史研究の分野であっても、21世紀初頭の今日でさえ、世界の研究者が広く使う電子コーパスだけでなく、未踏の、紙媒体による16-20世紀日記・書簡資料も大規模に調査・分析すれば、一日本人にも稀有な語法・未知な語法の発掘が可能であるなど、英語史研究へ大いなる貢献ができると考え、研究を開始した。

### 2. 研究の目的

否定辞縮約形について現代英語を対象とした研究は多々あるが、本格的な歴史的研究は、1620年代から1800年過ぎまでの劇作品を分析した Brainerd (1989 [1993]) 以外にはない。しかも、約200年間の変化を論じている割には、用例総数が乏しい。僅か461例に立脚しているだけである。報告者は、*don't*, *doesn't*, *didn't*, *can't*, *couldn't*, *won't*, *wouldn't*, *shan't*, *shouldn't*, *mayn't*, *mightn't* 等の否定辞縮約形について、歴史的異綴りも含め、網羅的にしかも大量に分析した。このような英語史研究は類例がなく、本研究によって行う大規模研究により、従来の英語史研究の間に含まれていた分野を補おうとした。

### 3. 研究の方法

(1) 用例収集にあたり包含と除外の厳密な分析基準を立て、1例ずつ慎重に吟味しながら用例を集めた。基準によって統計数値は大きく変動するため、それに依拠する結論が英語の史実を歪める恐れがあるためである。また、異なる調査資料に基づいて分析結果を得た他の研究者が、報告者の分析結果と比較できるようにとの配慮からである。

(2) 近年、電子コーパス利用の英語学が盛んであるため、報告者もこれを研究に採り入れた。しかし、報告者は、130冊、研究テーマによっては150冊の書籍による資料の網羅的

用例調査をも行っている。時間と労力を要する過酷な作業ではあるが、これにより、他者の追随を許さない、大規模研究となっている。(3) 一次資料からの用例収集の結果を厳密な生起数で示すだけでなく、それが歴史的にどのような意義をもつかについても、十分に先行研究を参看した上で詳らかにした。

### 4. 研究成果

3年間の受給期間に、概ね「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、1点の著書(共著)と2編の紀要論文を出版し、3点の国際会議口頭発表、1点の国内全国学会シンポジウム司会・講師の仕事を行った。補助金研究の合間を縫って博士論文の執筆も行っていたが、最終年最終月に、博士(文学)の学位を取得した。

#### (1) 2013年度

(国際会議口頭発表1)

まず、「第5回後期近代英語に関する国際会議」(ベルガモ大学[イタリア])に於いて、「A History of the Third Person Singular Present *don't*: Transition from *he don't know* to *he doesn't know*」と題する口頭発表を行った。[本報告書5.学会発表 参照]序論部分で、130冊の日記・書簡資料、*OED*<sup>2</sup> on CD-ROM, インターネットを通して欧米の大学から集めた伝記・小説等の260種類の電子コーパス、LOBコーパス、FLOBコーパスから収集した94,252例を根拠に、助動詞別・構造別・機能別に、25年単位ごとに統計数値を示し、否定辞縮約形の確立期は1850年より少し前の時期である点を示した。本論部分では、*He doesn't know* が一般化する19世紀半ばまでは、*He don't know* の語法が改まった英語においてさえ使われた点、前者が確立したのち後者は非標準の口語語法として使われ続けている点、特にアメリカ英語では、南部やニューヨーク州西部の地域ではいまだに *He don't know* の語法が存続している点を示した。否定辞縮約形に関する大規模研究はなく、賛辞をいただいた。特に、13,000を優に超える用例に基づいて、否定辞縮約形の確立時期には個々の助動詞に応じて段階があった点、*He doesn't know* 型が一般化するまでは *He don't know* 型が、高い教育を受けたと考えられる人々によっても当然至極に使われていた点に驚きを隠せないようだった。本研究課題が英語史の新事実の発見や修正に多大な貢献ができることを確信した。

次に、本研究課題である否定辞縮約形とその関連構文の用例調査を、直上の段落で述べた学会後の1週間を利用し、ヘルシンキ大学 VARIENG 研究所において行った。ARCHER 3.1, CLMETEV, PPCMBE などの電子コーパスも使わせていただき、極めて有意義だった。

この成果の一部は、翌年のヨーロッパ言語学会での発表に含めた。

### (2) 2014 年度

(国際会議口頭発表 1、著書[共著] 1、雑誌論文 1)

まず、本年度の国際会議発表は、「研究計画調書」では国際英語史会議 (ルーヴェン・カトリック大学 [ベルギー])での口頭発表を予定していたが、異例なことに第 18 回大会は本務校の前期試験週間直前の 7 月中旬に開催されることとなったため断念し、これに代えて、夏季休業中の 9 月に開催される第 47 回ヨーロッパ言語学会 (於アダム ミッキエヴィチ (Adam Mickiewicz) 大学 [ポーランド共和国]) に発表応募し、口頭発表許可通知が届いた。[本報告書 5 . 学会発表 参照] 130 冊の日記・書簡資料、Helsinki, CEECS, Newdigate Newsletters, Lampeter, ARCHER 3.1, LOB, FLOB, ACE, Kolhapur の各コーパスから収集した用例に基づき、詩を除き 1700 頃に消滅したとされる *I not say* 型否定平叙文が、*I do not say, I don't say* 型との競合の中でその後も根強く残存していたことを示した。本トピックに関する大規模研究はほかになく、意義深い研究であるとの賛辞をいただいた。

また、前年 8 月に開催された第 16 回国際英語史会議 (於ペーチュ (Pécs) 大学 [ハンガリー共和国]) における口頭発表内容を論考にまとめたものが、論考 “Affirmative Imperative *Do* in Modern English: With Special Reference to its Accelerators and Syntactic Patterns” として英宝社から刊行された書籍に掲載された。[本報告書 5 . 図書参照] これは、肯定命令文で使われる助動詞 *do* が辿ってきた歴史に関して、主に 1500-1900 年に書かれた 150 冊の日記・書簡資料を精査し、日記・書簡資料の調査が英語史の修正に多大な貢献ができることを示した論考である。具体的には、*Do* + 動詞、*Do* + *you/thou* + 動詞、*Do* + 副詞 + 動詞など、英語史の中で発見した 10 個の統語的異形の型と頻度を 50 年刻みに示しながら、歴史の中でどのような意味・統語論的環境下でどの程度使われ今日に至っているかを明らかにした。

さらに、2013 年 9 月にヘルシンキ大学 VARIENG 研究所において用例収集させていただいた結果の一部を、論文「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 *do* の発達の隠れた側面 (5) ARCHER コーパスを根拠に」として紀要に公開した。[本報告書 5 . 雑誌論文 参照]

### (3) 2015 年度

(国際会議口頭発表 1 件、雑誌論文 1 編、国内学会全国大会シンポジウム司会と講師 1 件)

まず、第 45 回ポズナニ言語学会において、

口頭発表を行った。[本報告書 5 . 学会発表 参照] 130 冊の日記・書簡資料、BNC を始めとする 10 の電子コーパス、OED2 on CD-ROM、欧米の大学から配信された 260 種類の電子コーパスから収集した用例を根拠に、現在分詞や動名詞を後置否定する構造は、英語史の定説とは異なり、決してまれな構造ではない点を示した。発表前の匿名審査員、聴衆、司会者から、極めて impressive だと激賞された。本研究課題が英語史の新事実の発見や修正に多大な貢献ができたことを実証した。二段落後に述べる博士論文 6 章の精髓である。なお、この国際学会発表の前には、マンチェスター大学に D. Denison 教授を訪れた。氏は ARCHER コーパスの開発者の一人で、役立つ操作方法の教示と、受動進行形と助動詞 *do* の歴史に関する研究討議は極めて有意義だった。

次に、国内学会全国大会では、近代英語協会第 32 回大会において、シンポジウム「後期近代英語における副詞の諸相」の司会を行うとともに、講師として口頭発表も行った。[本報告書 5 . 学会発表 参照]

本年度末の 3 月、三期に亘り受給してきた研究成果の三分の一を結合させ、“Uncovering ‘Rare’ Usages in the History of English” と題する特別論文を執筆した。これにより博士 (文学) の学位を授与され、1 年以内に著書として公刊する運びとなった。その第 2 章 “Diachrony of the Third Person Singular Present *Don't*” は、本研究課題の直接の研究成果である。また、第 6 章 “Diachrony of Present Participles and Gerunds Followed by *Not*” には、[本報告書 5 . 雑誌論文 ] が含まれている。

以上のように、報告者は、この 3 年間に、1 点の著書 (分担執筆)、2 編の雑誌論文、3 つの国際会議口頭発表、1 つの国内全国学会口頭発表の仕事を通して、否定辞縮約形とその関連構文の発達を中心に、近代英語における形態・統語変化を研究し、16 - 20 世紀日記・書簡資料が英語史研究へ大きく貢献できることを示した。日記・書簡資料が言語変化の最前線を知る上でいかに重要であるか、研究手薄な日記・書簡資料の調査は、英語史にいかに貢献できるかを証明した。文学作品に偏っていたこれまでの研究を補うことができたと考えている。日常レベルの言語使用が期待される日記・書簡資料を分析した報告者の研究により、特に非文学言語の研究の必要性が浮き彫りにできたと判断される。

英語史研究の中で、日記・書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した研究は類例がなく、報告者が行った大規模研究は、主として文学言語に基づいている従来の英語史研究とは一線を画し、その欠落部分を補うことになるであろう。国内外の研究の中で異彩を

放つ研究を世に示せたと判断している。この研究を、今後も更に発展させたい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

中村不二夫、"Diachrony of the third person singular present *don't*: Transition from *he don't know* to *he doesn't know* (2)"、*Mulberry*、65号、1-23、2015年8月、査読なし

中村不二夫、「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 *do* の発達の隠れた側面 (5) ARCHER コーパスを根拠に」、*Mulberry*、第64号、31-50、2015年1月、査読なし

[学会発表](計4件)

中村不二夫、"Diachrony of present participles and gerunds followed by *not*"、The 45th Poznan Linguistic Meeting [第45回ポズナニ言語学会](於アダム ミッキエヴィチ (Adam Mickiewicz) 大学 [ポーランド])、2015年9月17日

中村不二夫、シンポジウム「後期近代英語における副詞の諸相」司会と講師、担当「動詞に前置される否定副詞 *not* の歴史」、近代英語協会第32回大会(於愛知学院大学、愛知県・日進市)、2015年6月27日

中村不二夫、"Negative Declarative *I not say* in Modern English"、The 47th Annual Meeting of the ASocietas Linguistica Europaea [第47回ヨーロッパ言語学会](於アダム ミッキエヴィチ (Adam Mickiewicz) 大学 [ポーランド])、2014年9月11日

中村不二夫、"A history of the third person singular present *don't*: Transition from *he don't know* to *he doesn't know*"、The 5th

International Conference on Late Modern English [第5回後期近代英語に関する国際会議](於ベルガモ (Bergamo) 大学 [イタリア])、2013年8月28日

[図書](計1件)

中村不二夫、"Affirmative imperative *Do* in Modern English: With special reference to its accelerators and Syntactic Patterns", in K. Nakagawa, ed. *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, Tokyo: Eihosha. 総 viii + 454 ページ. 掲載ページ pp. 185-201、2014年6月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 不二夫 (NAKAMURA, Fujio)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 20149496